

た。四、五日ゆっくり考えました。だんだん話し合っているうち、主人も子どもたちも私の幼児教育に対する熱意にほだされ、私の希望をかなえてくれました。しっかりと留守番のかたも決め、万全の体勢を整えて新しい生活にとびこもうとしております。

理想的な幼児教育は、やはり理想的な環境、施設、設備の上に立ってなされるということをいつも考えておりましたが、幼児をすばらしい環境のもとで、理想的な保育が出来ると思うと考えるとだけでも楽しいことです。

わが子を育てることから出発した私の走馬燈のような十年は、本当に夢中で過してしまいました。これからは今までの経験をじゅうぶん生かして、幼児の持つて生まれた純真な気持をまっすぐに育くんで、理想的な幼稚園として発展させていきたいと日々念願しております。

(大泉文華幼稚園長)

思い出の中から

教師

相馬 誠子

幼児教育の道をあゆんできて、いつも思いつくのは、終戦のあの頃である。

誰しもが、将来の方針も定まらず、途方にくれていた中で、幼児教育についても、どうやって指導していったらよいのか迷っていた私は、ちょうど、故倉橋先生の講話があるとき、とび立つおもいで上京したものだ。

その時のお話は混沌としていた私の心に大きな光明となっただけでなく、十余年後の今もなお、教えられることが多いのであ

る。

そこで次に、この講話をかいつまんでお伝えすることにす。

○ 封建社会から、民主社会に移行されるにあたり、幼児教育の目的、および内容のどこを新しくし、どこに重点をおくか。社会が、民主的になるためには、一人ひとりが民主的にならなければならない。

そこで、民主的性格教育ということだが、当然重要視される。

では、民主的性格教育とは、どうい

点を育てていくのだろうか。

(一) 生きている面について

民主的生活は、実にいきいきとしていて、発表、実行の条件を具えている。それは、命令があつてするのでなく、自主的に、しかも独想的にするのでなくしてはならない。幼児は、元来、発表実行的であるから、これを、妨げないようにしかも自主的・創造的に育てていくこと。

(二) 個に生きている面について

自個を尊重すると同時に、他個を尊重するという「真の個」を育てることである。幼児は利己的であるが、この頃から少しずつ他人のことも考えられるようになるので、大切にこの面を育てていきたい。

その保育の実際面としては、次のようなことが云える。

1、自他の区別をはっきりさせる。

2、自己に『責任』をもつ生活をさせる

自主的にというだけでなく、やったことに對して、責任をもたせなければならぬ。

玩具を片づける場合も「あなたが出したのだから片づけましょう」と自己の責任の上から導いていくとき「真の個」が育てられる。

3、ありがとうの気持を強調する。

民主主義の純粹な点は「ありがとう」である。自分のすべきことを人がしてくれた場合は、「個の責任」においてありがとうの気持がおこるのは当然であるが、従来は目上の人にしてもらった時だけの感謝であつた。

4、人を馬鹿にしたり、批判しないこと。

民主生活においては、同じ人間同志があなどりみくびることはいけない。

この意味からも幼児の「つげ口」は好ましくない場合が多いので注意を

要する。

なお、批判と正しい判断とを混同しないようにすること。

(三) 社会的に生きている面について

社会的に生きるためには、社会という全体の中の個を養わなければならない。これは、幼児期においてはむしろかしいことだが、次のような實際面が考えられる。

1、人に迷惑をかけない。

社会に生きるためには、社会の中の個としての役目があるから、それを

守らないと、人に迷惑をかけるだけでなく、自己の役目を怠ることにな

る、という考えを基調にする。

2、いばらない。

地位名誉を目的とする教育でなく、人間尊重を究極とする性格教育である限り誰もがいばらないところに平等がある。

等がある。

下手な人が、上手な人を尊敬するこ

と

と

と

と

とにおいては不平等だが、上手な人が、下手な人に対していばらないところに平等がある。

『人間が、人間になっていく喜びを、じゅうぶん味い得る人でなければ、この教育は出来ない。したがって、人間が、人間になる教育は、指導者の人間性にまつのみである』 以上

この最後のことは、実に印象的であった。

教師の人間性が、すべての基になり、人間と人間のふれ合いの中に子どもたちが育つていくと思うと、教育者の責任は大きい。学生時代も、故倉橋先生には、このように教師自身の内省を呼びさますお話を、たびたび伺い、教えられたものだが、口にすればやさしいことのようにも、実際は非常にむずかしいと思う。時代とともに一層それかむずかしいことに思われるのは、私だけなのであろうか。民主社会こそ、人間を尊重し合う、美しい社会になるべきなのに、

中にはもう子ども時代から「人をおしのけても有名校に、そして将来良い就職に」と親たちにかりたてられ、出世教育をされて、いる状態がみられたり、そうでなくても、おとなたちの自己中心的な生活態度がいたるところに目立っている。

「生きる」ことが、第一条件になっている現在では、他人のことを考えているひまもなくしてしまうのかもしれないが、それだけに、せめてこれからの子どもたちには、民主的な性格教育をしっかりと呼びかけねばならないことを痛感する。

教育だけは、つねに純粹でありたいと思うのであるが、このような社会にあつての教育者のありかたはむずかしい。

人間を教育する立場にある教育者もまた、人間であるから、お互いの権利と義務が両立するように、つねに反省と努力を重ねていくことが必要であらう。

一方、保育界では、年々と、新教育の実際面についての研究が論理的に、科学的に

進められ、カリキュラムの考えかたやその指導法についても教えられることも多いのであるが、しかし、研究に、事務にとあまりにも忙しい毎日の生活は、自分の修養をつむ時もなく過ぎてしまふそうである。

忙しい中にも、心にたかまりをもつ生活を見出しつゝいかなければ、教師の人間性は深まるどころかかわきぎつてしまふであらう。こうした面での時間的なゆとりを、自分で見出しつゝいかなければならない。

この頃叫ばれている道徳教育についても、もちろん両親の生活態度の反映があるわけだが、教師の道徳的心情が、子どもに影響することもまた大きく、教育者としての自覚と責任を、強く感ぜずにはいられない。ともすると、理論や形に表れることによるみ起りやすい現代にあつて、

『人間尊重を究極とする性格教育の根本は、教師の豊かな人間性にまつ』
と云われた、故倉橋先生のことばは、真にかみしめて味わいのあるものである。